

大谷剛氏追悼 —昆虫の謎解きに捧げた人生—

生方 秀紀¹⁾

ミツバチの巣内社会行動を中心とした昆虫学の研究で名をはせた大谷剛氏（兵庫県立大学名誉教授）が急逝されてから2か月が経とうとしている。奥様からの突然の訃報は、研究者修行の二十代当時を共に歩んだ者の一人である私にとって、心の中にポッカリと穴を空けるものであった。葬儀（通夜）には北海道大学大学院理学研究科で坂上昭一先生の指導を受けた仲間である、山根爽一、稲岡徹、岡沢孝雄、山本道也の諸氏とともに参列し、しめやかに花を手向けたのが最後の別れとなった。

私が大谷君と初めて会ったのは、1970年春の北大理学部動物系統分類学講座の新入院生・研究生対面式の場であったと思う。私はその場に理学部から直接進学した修士課程新入生の一人として、大谷君は東京農業大学を卒業したての新入研究生として臨んでいた。その時の大谷君の印象は、小柄で口下手ながら坂上先生の直下の弟子としてミツバチの行動の観察・研究ができることにメラメラと意欲を燃やしている個性豊かな青年であった。

実は、坂上先生は研究生を一切受け入れない方針を一貫してとっておられて、先生の指導を受けようと思う学生は北大生であるにかかわらず、大学院動物学専攻の入試（専門〔系統分類学、形態学、生理学、発生学〕の筆記試験だけでなく、英語、ドイツ語の試験もある）を突破しなければならなかった。当時は今のように大学院入学定員過剰の時代ではなかったので、傾向と対策を把握しにくい他大学からの受験突破は余計厳しいものであった。現役で大学院に合格できなかった学生は普通、学部卒業を延期するなどして1年後の大学院受験に備えるのであるが、大谷君の場合は坂上先生の自宅に押しかけてまで研究生としての弟子入りを志願し、坂上先生が根負けして受け入れたのである。とはいえ、誰でも同じように受け入れられるわけではなく、大谷君の瞳の奥からほとぼる熱意と野望そして根気強さに先生がほだされたからであろう。

さて、大谷君は研究生として2年間、その後大学院生、オーバードクターとして9年間、坂上先生の指導を受けながら、北大理学部の道路向かいの少し奥にあった「ミツバチ研究室」（通称「ハチ小屋」）を拠点に、小屋のすぐ外に置いてあったミツバチの巣群の管理、室内に

ハチを導入しての観察巣箱を用いたハチの行動の観察に取り組んだ。ハチ小屋は坂上先生自身が北大理学部大学院に進学後まもなくから7年間起居して、ミツバチの行動の詳細な観察（実験を含む）を行った歴史的な研究拠点であった。そこで、大谷君は坂上先生の提案や指示の下で観察をするのではなく、むしろ坂上先生が見ていない、あるいは見ても自分とは異なった解釈ができそうなものを、より執拗に観察・追求しようという姿勢で臨んでいた。その一つが、観察巣箱内のハチの行動を1時間観察して2時間休むという観察スケジュールを1週間以上連続で行うという離れ業の実行であった。坂上先生もハチ小屋居住時、同じような無謀ともいえる長期的な断続観察をしており（観察終了後しばらく空間認知などに違和感が残ったという）、大谷君の観察はその向こうを張ったチャレンジであったろう（ハチ小屋居住記録は9年で、その点においても恩師の記録を破っている）。

大谷君の研究姿勢のもう一つの特徴は、流行している理論や広く受け入れられている学説に追随するのではなく、むしろ異端とされている説の再評価をすることや独自の説を展開することが目立った。これは、私がそうであったように、有力な学説や新しい理論を説く書物や論文を読み進めるうちにその虜になってしまうのではなく、大げさにいえばコペルニクスのような学説の大転換へのあこがれに起因しているようにも思えた。これも、大谷君の昆虫少年としての虫たちとの直接の経験に裏付けられた直観による彼なりの確信があつてこそのものであろう。

大谷君の意外ともいえる側面は大型コンピューターによるミツバチの巣内行動のデータ解析であり、それが大谷君の学位論文の骨格を支えるものになっている。1970年代後半から80年代初頭にかけては、パーソナルコンピューターが一般に普及する前であり、学内に数えるほどしかなかった電子計算機のもとに通い、それに自ら構築したプログラムとデータを読み込ませ、複雑なデータを設定した観点のもとで解析させるという超人的な作業を伴うものであった。大谷君の著書『おすはささない！ミツバチ』には、データを大型コンピューターにディジタイザー機能を利用して読み込ませる独自の工

¹⁾ Hidenori UBUKATA 北海道教育大学名誉教授 トンボ自然史研究所代表

夫が丁寧で紹介されている。

昆虫少年だった大谷君は、ハチ以外の昆虫にも詳しく、同じく昆虫少年出身だった山根爽一さんや山本道也君と丁々発止のやりとりをしていた。物理少年出身の私は指をくわえてみているか、自分が遅ればせの専門としていたトンボの行動にからめて口を出すのが関の山であった。そういうこともあり、大谷君は北大構内で山本君とモンシロチョウ成虫の個体追跡による行動観察を行ったり、苫小牧市にあった北大演習林に道路開発計画が持ち上がった際にその影響を予測するための昆虫群集の自主的共同研究にも積極的に参加したりと、幅広い研究活動に参加していた。

1970年代後半の時期、坂上先生の指導を受けた弟子たちは、オーバードクター2、3年までの間になんとか就職口を見つけて巣立っていったが（私も4年半でなんとか就職）、80年代にはいと研究職に就くのは一層厳しくなり、81年に大谷君は栗林慧自然科学写真研究所を拠点としたフリーランスの昆虫研究者へと転身した。その数年前に栗林さんがハチ小屋に寄宿しながらミツバチの写真を大谷君の協力を得ながら撮影したのが縁であった。私も一度長崎県田平町の栗林研を訪ね大谷君と再会したことがあったが、愛猫ナナと家族のように暮らしながら、栗林さんとコンビで各種昆虫の生きざまの奥底までを探っている様子であった。

アカデミズムを離れながらも、このような虫三昧の経験と学窓で培った学問的知識を動員して、一般向け・児童向けの昆虫図書（前掲書のほか、『昆虫のふしぎ 色と形のひみつ』、『ミツバチ』〔どちらも栗林さんと共著〕、『ミツバチの生態学』〔翻訳〕、ほか）を数多く出版していったことは、後の兵庫県立博物館学芸員（兵庫県立大学教員併任）への就職に際して実績を不動のものとしたことであろう。もちろん、専門の論文の質と量も相当のものであったが（その一端は、「ミツバチの分業と個性」と題した総説〔井上民二・山根爽一編『昆虫社会の進化ハチの比較社会学』所収〕に伺うことができる）。

6年間在籍した栗林研を離れた後の2年間は、文筆活動を続けながら東京動物園協会嘱託として動物園の案内員をしていたが、これも博物館という社会教育施設の事業展開のうえで貴重な経験となったに違いない。実際に、大学の教員でありながら象牙の塔に籠ることなく、地域に出て社会人や子供たちに昆虫観察の楽しみや奥深さを伝える活動にも熱心に取り組んでいた様子は、兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授の肩書で出版した単著『昆虫一大きくならない擬態者たち』の中の記述からも読み取ることができる。この本ではまた、昆虫にまつわる様々な謎を独自のアイデアで解き明かしていくスタイルが貫かれている。学問の流行に乗るのではなく、自ら抱いた疑問を自ら解いていく大谷君の研究姿勢の面目

躍如である。

6年前に大谷君が大学を定年退職した際の祝賀記念行事には私も招待され、大谷君の記念講演からは昆虫についての社会教育の極意を感じ取ることができた。夕刻からの記念パーティーでは私にもスピーチの機会があり、旧友の一人として大谷君の人となりについて簡単に紹介させていただいた。大谷君は研究面以外でも奇才ともいえる才能を発揮していて、俳句を作っては北海道新聞の文芸欄で特選（自らを染めて身をもむ山紅葉）に選ばれたこともある。また、院生同士の飲み会でしばしば披露したウクレレ演奏の特技が高じて作詞作曲も手掛け、そのうちの自信作「風は今日も」（演歌風）をNHKTVの「あなたのメロディー」に応募した。すると、NHKから連絡があり、「歌う歌手は石川さゆり、（札幌から東京までの往復）旅費は自分持ちという条件で番組収録に出場可能かどうか？」と問われたという。私は「滅多にないチャンスだよ、行きなよ」と背中を押したのだが、大谷君は「歌うのが森昌子だったらよかったんだよな。旅費も出ないし…」と結局辞退してしまった。もしあの時テレビに出ていたら売れっ子作曲家としてデビューしてしまい、日本におけるハチ学研究的進展を遅らせる結果になっていたかもしれない。大谷君の著書のうちの『人間のからだは小宇宙』は、放送禁止用語まで駆使しての軽妙洒落な1冊だが、これも彼の探求心が育てた生物学の知識と生き物としての人間への強い好奇心が結晶したものと見える。

4年前の6月には、札幌で北大動物系統分類学講座の同窓会が開かれ、その中の直系の弟子たちが坂上先生の墓参りをする機会があった。残念なことに、それが私と大谷君が膝を交えながら懇談した最後の場面となってしまった。その墓参の前後から湧きあがったのは、恩師である坂上先生の生前の研究者としての姿を弟子たちが文章で描き、一冊の本にしようという計画である。言い出しっぱは私であったが、大谷君は最も熱心な賛同者の一人として松村雄さん、山根爽一さん、私とともに発起人としての活動に参加した。この計画は、昨年後半から急速に具体化し、弟子以外の高名な昆虫社会学者からの寄稿もいただけることになり、再来年の遅くない時期には刊行しようというステージにまで進展している。その中に、大谷君本人が描く坂上先生との師弟関係についての回想記を収録することができなくなったのは残念である。ただ、その師弟関係は私のような兄弟弟子から垣間見えた部分もあるので、その特徴的な部分だけでもショートストーリーとして盛り込めるのではないかと考えている。

出版の暁には坂上先生はもちろん、大谷君の墓前にもその1冊を供え、生前いただいた厚誼への感謝の意をささげたいと思う。